

平成 25 年度ユネスコスクール年次報告書

報告期間：2013年4月～2014年3月

※今年度の年次報告書は担当者の名前、メールアドレス、添付資料を除き、HP等で公表
します。また、ユネスコスクールの質の確保の観点から、報告書の内容が一定の基準に満
たないもの、報告書が未提出の場合には、ユネスコスクールの認定取消を勧告させていた
だきますので、あらかじめご了承ください。

1. 学校概要

学校名 大阪私立羽衣学園高等学校

種別 保育園・幼稚園 小学校 小中一貫教育
 中学校 高等学校 中等教育学校
 教員養成 技術/職業教育
 その他 ()

住所 〒592-0003
大阪府高石市東羽衣1-11-57

E-mail : hagoromo@hagoromogakuen.ed.jp

Website : http://www.hagoromogakuen.ed.jp/

児童生徒数: 男子 名 女子 名 合計 名
 児童・生徒の年齢 15 歳 ~ 18 歳

2. 担当者 ※公表しません

3. 実施活動（複数選択可）

- 地球規模の問題に対する国連システムの理解
- 国際理解
- 世界遺産
- 平和・人権
- 環境
- 気候変動
- 生物多様性
- エネルギー
- 防災
- 食育
- 伝統文化
- そのほか (識字・貧困 E F A)

4. 活動内容

(1) 1年間の主な活動内容について記載願います。

※当報告書についてはユネスコスクールホームページに掲載するため、活動内容については、添付資料ではなく本報告書にご記入願います。

活動報告 1 国際理解と平和教育と情報教育（継続の部分と新規の部分あり）

通常の授業時間を使用（総合的な学習の時間を含む）

ユネスコクラブの活動として実施

- ・実施時期 2013年4月～2014年3月
- ・事業形態 対象者 高校2・3年生
- ・他機関等との連携 文部科学省ユネスコ国内委員会・社団法人日本ユネスコ協会連盟 ユネスコアジア文化センター NPO 団体

・目的・目標

世界の教育問題を軸にして、世界寺子屋運動のポスターやパンフレット作成を、情報の授業などで実施し、情報活用の実践力の育成をはかるとともに、教育の重要性や寺子屋運動の意義を学び、国際理解、平和教育の一助とする。さらに発展として、実際のボランティア活動へつなげる。また交流時に必要な英語・ディスカッション・コミュニケーション・分析の能力を身につける。

- ・概要 学習のねらいとしては、世界寺子屋運動への支援を通して出会った人やものとの関わりを持つ中で、情報教育、国際理解、平和教育、人権教育などを推進し、総合的な学習の時間がめざす、自ら学び自ら考える力など全人的な生きる力の育成を図ります。また、世界寺子屋運動をより多くの皆さんに理解してもらうための効果的なリーフレットの要件やデザインを考え、追及する活動を通して、より分かりやすく印象的に伝える方法を学び、情報活用能力を育成します。

教科 情報での取り組み

(1学期) 概要についての説明

アフリカやアジアの地域の学校関係のビデオを見る。

ユネスコについて知る。寺子屋運動や貧困問題について知る。

○具体的・効果的な方法を考える

○他校との交流で意見交換する（外国の生徒とも意見交換する）

○リーフレット作りについて学習する。

(2学期) リフレットを実際に作成する。

○他校との交流で意見交換する

○作成したリーフレットを使って校内で活動を行う。

○近隣の学校にも呼びかけて活動の輪をひろげる

○専門家を授業にまねきワークショップを行う。

○学園祭で展示発表をする。

○TV会議を用いて 小学生と交流する。

(3学期) 振り返り

配布先の生徒や先生に意見を聞き 改善していく。

相互評価を実施する。

研究の成果 日本では考えられないことですが、文字を読んだり書いたりできない、学びたくても学べない子どもたちがいる現状と出会い、向き合う参加校の子どもたちと教師が一緒になって、「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かねばならない」というユネスコ憲章前文の理念に迫るプロジェクト学習になったと思います。

(1) 世界諸地域の文化の多様性について理解・分析することができた。

(2) 世界の中の日本人としての自覚を持ち、国際的視野に立つことができた。

(3) ユネスコや国際連合の役割について理解することができた。

- (4) 発展途上国の歴史やまた 人権について正しく理解することができた。
- (5) わかりやすいパンフレットを作成することができた。
- (6) インターネット検索をすばやく行いかつ的確な情報を収集することができた。
- (7) 物事をいろいろな角度から見て考えることができた。(いいところ、悪いところ)

活動報告2 異文化理解 (一部新規)

- 通常の授業時間を使用 (総合的な学習の時間を含む)
- ユネスコクラブの活動として実施

- ・ 実施時期 2013年4月～2014年3月
- ・ 事業形態 対象者 高校2年生・ボランティアクラブ員
- ・ 他機関等との連携 大阪大学・アメリカNJ州教育委員会
シンガポール・マレーシア・インドネシア高校

・ 目的・目標

羽衣学園高校と米ニュージャージー州メモリアル・ミドルスクールの生徒たちが、スクリーン映像を通じて意見を交換しあう“同時学習”を行った。遠く離れていてもすぐ隣にいるように画像を合成できる「ハイパーミラー」という遠隔対話システムを9年前から活用しての実践の継続である。今回の実践は、事前に自己紹介のビデオ撮影をして、掲示板やメールでのコメントや画像を通じての交流、その後掲示板を通じて意見交換をしあうシステムを活用した。昨年度は自分たちの撮影した写真について対話を図ることを一歩前進させテーマを「エコ活動 (今年はリサイクルを重点的に)」に設定した。また、お互いのまちの紹介につなげるようねらい、「他教科への拡大も」ねらいに入れ、新タイプの国際遠隔授業として更なる広がりを期待した。

・ 概要

前半ステージ

5月～8月

- (1) 導入 主旨説明を実施する。
- (2) ウェブ検索実習 自己紹介ビデオ撮影させる。またビデオを編集する。
- (3) 機器の使い方の理解 デジタルカメラ・ビデオや掲示板などに慣れさせる。
- (4) テーマ (リサイクル) についての意見をメールや掲示板で実施する。小グループいくつかにわかれさせ発表させあう。最終的なテーマをまとめさせる。
- (5) グループ内意見交換 発表項目を理解させ意見をまとめさせる。まずは日本語によるまとめを書かせる。そのあと英訳させる。
- (6) 海外生徒 (アメリカ東部の学校) との意見交換 送ったまた届いたビデオ・写真やメールに、異文化的な理解の違いが見られないか考えさせメールやホームページを利用して意見交換させる。

後半ステージ

9月～10月

- (1) 校内外調整 主旨を発表し当日参加生徒・見学生徒を募集する。
- (2) アメリカ・日本側各学校で担当教員より 企画の趣旨説明をする。
- (3) エコリサイクルというテーマでグループ分けをして掲示板などへの書き込みを実施する。
- (4) エコリサイクルから連想するさらに細かいテーマを選び、参加生徒各個人・グループで調査・研究を実施する。教員は生徒の進め方に、質問に答えるなどして、個別指導を実施する。

11月

- (5) シンガポールとTV会議を実施する。
事前に発表内容を プレゼンテーションソフトなどにまとめる。

- 文化についての理解を深めあう。またTV会議の手法に慣れる。
- (6) 振り返りを実施する。(個人・グループの研究を全体で共有する)
12月～3月
- (7) アメリカとTV会議を実施する。
テーマ「エコ」と文化についての理解を深めあう。具体的に意見交換をする。
事前に紹介する内容をグループでまとめる。特に自分たちの地域に
関しての発表を意識する。
- (8) 振り返りを実施する。(個人・グループの研究を全体で共有する)
プレゼンテーションソフトにまとめる。
- (9) お互いの共有できる Webページでさらに交流を続ける。

研究の成果

これまでの実践を活かし、お互いに今度は実際にビデオ会議や掲示板などのICTを活用して意見交換をして文化理解の中身を深めることができた。コミュニケーションを通じて、自分達の考えを簡潔にまとめ、相手にわかりやすく表現することや、相手を確実に理解するといった。実践的なコミュニケーション能力を習得する。また特にコラボレーション力が大切だと生徒達は感じていたようだ。生徒の様子：特に海外の学生との場合は、共通のテーマをベースにしてプレゼンをするということが必要なので、世界との交流(国際交流にとどまらない)に対する好奇心や新しい企画(構想)・創造に向かう探究心をもち、国を超えて学ぶコラボレーション力が必要となった。指示まちではなく、自分ですすめていく自律性をもち、またその結果に責任をもつ力、一方で他人に対して働きかけ、巻き込める、チーム内で働くことができる力の必要性を強く感じた。リーダーシップとチームワークをバランスよく保つ能力が必要だということを実感したようだった。

- (1) 掲示板を通しての異文化交流であり、それぞれの国の考え方や違いをメールやビデオ紹介を通して実感することができた。今までの交流とは違う迫力を感じながら交流を実施した。またお互いの生徒の考えを知り、理解を深めながら交流したため、深いレベルでの国際交流ができた。
- (2) 生徒主体のプロジェクト学習を実施することにより、主体的に学ぶ意欲や問題発見・解決能力を身に付けることができた。
- (3) 海外の生徒と直接コミュニケーションをとる中で、お互いの文化についての正しい認識をもつことができた。
- (4) さまざまなIT技術を利用する中で、IT技術力の向上ができた。
- (5) 交流を英語または日本語で行うため、相手国の言語に対する関心と学習意欲を相互に喚起することができた。

活動報告3 異文化理解とコミュニケーション能力の育成(継続)

通常の授業時間を使用(総合的な学習の時間を含む)

- ・実施時期 2013年4月～2014年3月
- ・事業形態 対象者 高校2年生
- ・他機関等との連携 卒業生・私立大学
- ・目的・目標

コミュニケーションスタイルのちがいの背景には、文化の違いがあること、また非言語(ノンバーバル)なコミュニケーションの存在を意識することで、言葉でなくても気持ちを伝えることができること理解する。

・概要

教科 総合的な学習での取り組み

- (1 講座目) コミュニケーション 文化やコミュニケーション方法が違うことで起こる誤解などを考える
- (2 講座目) コミュニケーション 言語以外のコミュニケーションのとり方を知る。
- (3 講座目) 異文化理解 留学生の立場から 留学生の主張を聞き、国際交流や異文化

理解で大事なことについて考える。

- (4 講座目) コミュニケーション 3つのコミュニケーションを知る。
- (5 講座目) 異文化理解ワークショップに向けて 次回のワークショップに向けて インドネシア・中国・タイ・韓国・ベトナムのグループ別 事前学習
- (6 講座目) 異文化理解 ワークショップ 専門にアジアの言語を教える方々を招き その国の言語や文化について知る。
- (7 講座目) 修学旅行事前学習 アボリジニーの文化を学ぶ
英語の問題集で学ぶ・ビデオ学習でオーストラリアの先住民の文化に触れ、文化相対主義の考え方について学ぶ。
- (8 講座目) 修学旅行事後学習 コミュニケーションの実際
オーストラリア現地でのコミュニケーションについて振り返り、またその違いなどについて学ぶ。

研究の成果

この活動は高校2年生が全員体験する活動です。修学旅行がオーストラリアのメルボルンでのファームステイを含むため、多くの事前学習をそれまでに経験する。現地の水の問題や生活の問題などにも踏み込んで学習する。ファームステイでは指示まちではなく、自分ですすめていく自律性をもち、またその結果に責任をもつ力、一方で他人に対して働きかけていく力の必要性を強く感じた。また自然の大切さを実感したようだった。

活動報告 4 ASP 大阪 高校生フォーラム（継続と新規）

- 通常の授業時間を使用（総合的な学習の時間を含む）
- 時間外活動の時間を使用 ユネスコクラブの活動として実施

- ・ 実施時期 2013年4月～2014年3月
- ・ 事業形態 対象者 高校1・2・3年生
- ・ 他機関等との連携 文部科学省ユネスコ国内委員会、大阪府立大学・財団法人日本ユネスコアジア文化センター<ACCU>、
後援；大阪府教育委員会、海外ネットワーク参加国：韓国（上黨高等学校）、中国（中国人民大学附属高校）他・プログラム概要

このセミナーは、2014年に日本で開催される「DESD 最終年會合」での政府閣僚級會議（愛知）に合わせて実施されます “UNESCO World Forum of ASPnet High Schools” (UNESCO ASPnet 高校生世界フォーラム<開催地岡山市>) に向けた準備セミナーとして開催されます。

このセミナーの特徴は、世界で行なわれている ASPnet 高校生国際會議と同様、高校生自身の手によってフォーラムが運営され、参画と発信等を担うことができるスキルや心構えを育てることにあります。そして、この成果を確かなものにするため、2012年度は「東アジアフォーラム（中国、韓国、日本）」を実際に開催し、“若者世代”として共に“持続可能な未来”を考え、学びあう国際フォーラムを運営しました。

2013年度の準備セミナーは、UNESCO ASPnet としての「7カ国高校生国際會議」や「小中高大学生による国際ワークショップ」等の運営経験を持つ大阪府立大学／大阪ユネスコスクール（ASPnet）ネットワークが文部科学省から委託を受け、開催地の岡山市／岡山 ASPnet 加盟高校等と協力して実施するものでした。また、広く日本全国の高校生が参加して世界フォーラムを運営することができることを意図して、2013年度の「準備セミナー」への参加を希望する高校生の募集を行ないました。

次年度はいよいよ岡山での大会に向けての参加となります。

活動報告5 国際理解と地域理解と情報教育（継続）

時間外活動の時間を使用 ユネスコクラブの活動として実施

- ・実施時期 2013年4月～2014年3月
- ・事業形態 対象者 高校2年生
- ・他機関等との連携 文部科学省ユネスコ国内委員会・社団法人日本ユネスコ協会連盟 ユネスコアジア文化センター NPO 団体
- ・目的・目標

本プロジェクトは、児童・生徒が、地域を愛し、地域の文化や自然を守り 伝えようとする気持ちを育むことを目的に実施します。授業の中で、“私のまちのたからもの”をテーマに、自分たちで撮ったデジタル写真や絵に文字や音声を入れたデジタル・スライドショーを作成します。その後、学校の代表作品を募集して全国コンテストに参加します。

・概要

京都の葵プロジェクトとなどとの連携を図る。

※ 葵祭りでは葵を約1万枚使用しています。現在はその殆どを人里離れた山中に自生する葵で賄っていますが、近い将来には再生した境内の葵や提携協力いただいている各機関で育成した葵によって祭りに使用する葵を賄い、古来の伝統祭事を多くの方が支援し伝承するというモデルにできればと考えています。葵プロジェクトでは「葵の再生を通じて伝承する人として大切な文化」をコンセプトに各教育機関と提携して葵の株分けを行い、再生の植生事業を体験できる環境を提供くださっています。本校も株をいただき、実際に校内で育てています。

※ 次世代を担う子供達が、身近な自然の中から消えようとしている葵を育てる。小さな命を育む過程の中で、環境という概念や生命のサイクルというものを理解していきます。人と自然の関わり、人と人との触れ合いを葵を通じて様々なコミュニケーションの中から学んでいきます。この「葵プロジェクト」は人と自然、人と人とのネットワークを構築して肅々と受け継がれてきた大切な文化、本質的なココロを取り戻すことを目指しています。

月	予定	学びのプロセス	内容	こんな力がつく
6月	主催者HP上にて募集要項掲載（12月上旬まで随時、応募受け付け）			
6月～11月	調べ学習/校外学習 写真を撮影など	「調べる」 「知る」 「考える」	自分たちの暮らしている町のこと知っている？ 地域の文化や自然について調べる、体験する。伝えたいことを決め、写真を撮る。	・自分たちの住むまちへの理解を深め、見つめ直す力。
	スライドショーの作成	「表現/創る」	一番伝えたいことは何かな？ 写真とナレーション（言葉）と音楽を組み合わせてスライドショーを作る。	・自分の考えをはっきり表現する力。 ・伝える相手と目的を意識して、より分かりやすく、より印象的で、より説得力を増すように伝える力。
	作品の相互評価	「発信する」	他の人に発信しよう！ インターネットTV会議などを利用して他の参加校に発信し、相互評価を行う。「学び合い」	・相手意識を持ったコミュニケーション力。 ・他者の意見を聞く力。 ・他の地域の文化にも関心を持ち、尊重することのできる力。
12月上旬	作品の応募締切＜必着＞			
2月	審査会			
3月	受賞作品をHPで発表			
1月～3月	活動発表会	「まとめる」	学習したこと・活動を伝えよう！ 校内や地域で活動発表会を行う。	・プレゼンテーション力。
	地域活動	「行動する」	自分たちにも何かできるかな？ 地域の人びとやメディアに働きか	・社会に働きかける力。 ・自発的・主体的に取り組む力。

		ける。	・人や地域社会とのつながりを大切に する力。
--	--	-----	---------------------------

・成果

- (1) 「調べる」→「考える」→「表現/創る」→「発信する」→「まとめる」→「行動する」といった複合的な“学びのプロセス”の中で、児童・生徒が豊かな学力を身につけた。
- (2) 校内・外、異年齢、地域社会、海外などとの“学び合い”から、相手の立場に立って考える力や、思いやりの心を持ち、人と人、社会とのつながりを実感した。

※ またこの実践は、グリーンウェイプロジェクトにも連携しています。

・国連の生物多様性条約事務局が、5月22日の「国際生物多様性の日」に、世界各地の青少年の手で、それぞれの学校の敷地などに植樹を行おう、と呼びかけているものです。植える樹種(地域の在来種や固有種など)や場所・方法などを生徒たちが自ら考えていく過程で、彼らに生物多様性やその保全の必要性などについて学んでもらおうというのがこの活動の趣旨です。この日に世界各地で行われた行事は、その日のうちにグリーン・ウェイのウェブページで見ることができるようになり、世界各地の仲間と経験を共有することができます。

活動報告6: このグリーンウェイプロジェクトに連携して 本校でも積水ハウスさんの協力を得て5本の木を植え、その成長を見守っています。また 花いっぱいプロジェクトということで校内に花を増やしたり、緑のカーテンなどにも一部取り組んでいます。実際に積水ハウスさんと連携して ドクターフォレストとして学校に来ていただき緑の学習会を校内でも実施もしました。

活動報告7 国際理解とアート (継続 ただし相手校は新規)

- 通常の授業時間を使用 (総合的な学習の時間を含む)
- 時間外活動の時間を使用 ユネスコクラブの活動として実施
- その他 (美術部として実施)

- ・実施時期 2012年4月～2013年3月
- ・事業形態 対象者 高校2年生、美術部
- ・他機関等との連携 ジャパンアートマイル
School: BERGEN COUNTY TECHNICAL HIGH SCHOOL
Address: 275 PASCACK ROAD, NJ, USA

・目的・目標

- (1) 「自己紹介や壁画の協同制作を通して、相手を理解し自分の思いを伝えることができる (コミュニケーション)
- (2) 交流相手を通してステレオタイプでない生の異文化に接し、相手を理解することができる (異文化理解)
- (3) 自分たちの地域や文化を調べて伝えることで、自分たちの良さを再認識することができる (自文化理解)
- (4) テーマについて調べたことや考えたこと、人に伝えたい思いを絵で表すことができる (表現)

- ・概要 昨年度はアメリカの学校と下記のように取り組んだ。

	段階	学習活動	ねらい	教科・領域
5月	導入 2～3h	1) オリエンテーション ・ワークショップ体験など 2) アートマイル作品を鑑賞する ・Web/ゲストティーチャー	(4) 世界と自分たちのつながりに気づく (5) 壁画制作・国際交流への意欲を高める	図工・美術
6月	テーマ学習 3～5h	1) テーマを決め、下調べをする ・ゲストティーチャー ・ビデオ/図書/インターネット	・環境、異文化、食など交流テーマについて関心を深める	国語
7月	情報収集 2～3h	1) 学校や地域を紹介できる資料を集める ・校外活動/カメラ・ビデオ 2) 外国語で自己紹介を練習する ・ALT/地域の外国人の方	(6) 自分たちの学校や地域の特徴をメディアや外国語を使って紹介する (7) 外国語を学ぶ必要性を実感する	外国語活動
9月	自己紹介 4～6h	1) 自分・学校・地域を紹介する ・自己紹介カード/ビデオレター ・掲示板/TV会議	(8) 相手と出会い、仲間意識を育てる (9) 相手の学校や地域の特徴を知り、自分たちの特徴を分かり直す	外国語活動 技術・家庭科 国語
10月	テーマ交流 4～8h	1) テーマに沿って自分の国や地域・相手の国や地域を調べる ・図書/インターネット ・校外活動 2) 調べた内容を報告・共有する ・掲示板/TV会議	交流相手と共通の視点でテーマを掘り下げて調べる ・相手が理解できるように内容や表現方法を考える ・壁画のメッセージを一緒に考える	社会科 国語 外国語活動
11月	構図決め 3～5h	1) 構図と制作分担を決める ・掲示板/TV会議 2) 下絵をデザインする	・壁画の制作意図を提案し、交流相手の意見と調整する ・構図に合わせて制作分担を考える ・日本側の下絵をデザインする	特別活動 図工・美術
12月	日本側制作 6～8h	1) キャンバスに下絵を写し、色を塗る 2) 描いている様子や作品を相手に伝える ・掲示板/TV会議 3) 半分できた絵を相手に郵送する	・できあがりを予想しながら仲間と協力して壁画を制作する ・相手の気持ちを意識しながら壁画を制作する ・作品を通して伝えたい気持ちを持つ	図工・美術

1 2月	相手側制作	1) 相手の制作過程を知る ・ 掲示板／TV会議	・ 相手校の進行具合を見守り、感想を伝える ・ 相手の様子から完成作品へのイメージをふくらませる	
3月	鑑賞 2～3h	1) 完成作品を展示・鑑賞する 2) 作品や活動をふりかえり、感想を伝え合う ・ 掲示板／TV会議	・ 完成の喜びをクラス全員で味わう ・ 壁画の感想を出し合う ・ 交流相手に自分たちの思いを伝える ・ 活動を通して学んだことをまとめる	図工・美術 外国語活動 特別活動

活動報告8 ASP 海外の学校とのESD学びあい（継続）

- 通常の授業時間を使用（総合的な学習の時間を含む）
 時間外活動の時間を使用 ユネスコクラブの活動として実施

- ・ 実施時期 2013年4月～2014年3月
- ・ 事業形態 対象者 高校1・2・3年生 ボランティア部員
- ・ 他機関等との連携 文部科学省ユネスコ国内委員会、大阪大学、本校卒業生
- ・ 海外： 中国（中国人民大学附属高校）マレーシア・韓国の生徒 一部
- ・ 目的・目標 ICTを活用した海外の学校や機関とのESDをテーマにした学び合いアメリカ、韓国、中国の生徒との交流を通して、異文化に触れお互いの文化に対する興味・理解・関心を高める。
- ・ 防災教育の共有
- ・ 概要
 - 1学期 中国の学生とESDに関して意見交換開始。
 - 8月 日本で共同でESDに関しての取り組みをプレゼンテーションにまとめて発表（英語）本校訪問
奈良世界遺産訪問、災害に備えた学習
 - 5月 マレーシア学生 本校訪問
大阪文化遺産訪問、防災教育共有（グループワークなど含む）
 - 2学期 アメリカ、韓国の学校とそれぞれ共通のWebサイトを作成し交流開始
 - 10月 アメリカ、韓国、国内小学校、JICA関係者とそれぞれ別途TV会議
 - ツール：ブログを使った交流学習
エチオピア、ザンビア、バングラデシュ、モロッコ、ラオス、ルアンパバン、セントルシア、ヨルダン
そしてそれをもとにPPTを作っていく作業の続きを実施。

～PPTに載せる項目～

1. ・〇〇（隊員の赴任している国名）の基礎知識：地図上での場所、人口、簡単など
歴史、言語、宗教、民族、食べ物、住居など
・ 隊員の紹介：名前、写真、任地、職種、毎日の生活
2. これなしでは語れないという国の最大の特徴
3. その国と日本の違いその国の文化を代表する言葉：その国の人がよく使う言葉など、文化・生活・人々の考え方、経済格差など
4. その国から日本が学ぶべきことは何か

5. その国が直面する課題：その国の課題を挙げ、それについての解決策
6. 日本からの援助はあるのか、その国に日本からの援助はどのようにされているのか
7. 隊員の活動内容と隊員が直面している課題、現在の業務内容、困っていることや嬉しかったことは何か
8. 隊員から送ってきた写真の紹介

3学期 各テーマのプレゼンテーションを完成させ、互いに発表しあい、意見交換を実施

- 1月 大阪私学国際研究会などで成果報告。
生徒もユネスコスピーチコンテストで発表など実施。

成果：アメリカとシンガポールは大阪大学、韓国とは APEC 教育機関、中国とは大阪ユネスコスクールネットワークなど他団体とも協力して実施することができた。できるだけ ICT を効果的に活用してプロジェクトを効果的に進めることができた。また一方で JICA にも協力いただき、海外の協力隊員ともメール交換や TV 会議を実施してそれぞれの国の世代の考え方や違いを実感し、情報活用の実践力を深めた。

※アメリカとの交流は一部、大阪府高石市の姉妹都市の学校にも協力をしていたが関係で高石市の教育委員会及び高石市姉妹都市交流委員会にも協力をいただいた。

※APEC 教育機関とは、文部科学省からご紹介いただいたプロジェクト型学習の一つで韓国の複数の学校と次年度は食をテーマに韓国の文部科学省が持つ交流サイトを通じて交流を始めた。

活動報告 9 海外の学校と国内の学校と学びあい（継続）

- 通常の授業時間を使用（総合的な学習の時間を含む）
 時間外活動の時間を使用 ユネスコクラブの活動として実施

- ・ 実施時期 2013 年 4 月～2014 年 3 月
- ・ 事業形態 対象者 高校 1・2・3 年生 ボランティア部員
- ・ 他機関等との連携 沖縄県高等学校中国語教育研究会 ICT 国際交流学習部会文部
沖縄県教育委員会、台湾高雄市教育委員会

海外：Kaohsiung Vocational industrial Senior High School（台湾高雄市）・
沖縄向陽高校

高校の中国語、英語、情報の時間を使い、Kaohsiung Vocational-industrial Senior High School（台湾高雄市）、中国人民大学附属中学（中国北京市、日本の高校に相当）の協力を得て取り組みます。

台湾、中国の高校は9月から学年が始まるため、5月から7月はコミュニケーションやコラボレーションに必要な中国語や英語の表現を学ぶとともに、「つながる」を利用して、実際にさまざまな背景をもつ他者とコミュニケーションする機会をもつことで、相手を意識したコミュニケーションのありかたや工夫の方法について考察します。また、SNSやデジタルカメラなどの利用を通しICTを使う基礎的な力を育成します。

9月以降は、中国、台湾の高校も参加し、まず、テレビ会議や「つながる」を利用してそれぞれの自己紹介や学校・地域を紹介する活動を行い、互いに対する親近感や共感を育みます。その後、「つながる」やメールを使ってアイデアや意見を交換しながら、中国語、英語、日本語を使ったフォトストーリーづくりに共同で取り組み、お互いの価値観や感性の違いと共通点を発見し、楽しむとともに、異なる背景をもつ人たちとのコラボレーションを経験します。また、これらの活動を通して、同世代とのリアルなコミュニケーションやコラボレーションのなかで学習言語を使う体験を積み重ねていきます。

4月 研究メンバー会合

今後の活動について打合せ。交流学習の授業デザインについて専門家の助言を受ける。

5月 ICTツールの基礎的な力を身につける

「つながる」に登録し、SNSの基本的な使い方を知る。デジタルカメラの使い方を確認し、画像の加工の方法を学ぶ。(高校、中国語・英語・情報。以下同様)

6月 さまざまな背景をもつ他者とのコミュニケーションについて考える。コミュニケーションで使いたい表現を学ぶ。学んだことをいかしてコミュニケーションしてみる。

「つながる」上のさまざまな書込みを見て、異なる背景をもつ他者とのコミュニケーションのあり方や工夫できることを話し合い、日本の参加校間で共有する。自分たちがコミュニケーションで使いたい中国語や英語の表現を学ぶ。これらをいかし、「つながる」でさまざまなメンバーとやりとりをしてみる。デジタルカメラで撮影した写真も添付する。そこで考えたことも日本の参加校間で共有する。

7月～8月 研究メンバー会合

これまでの活動をふりかえり、異なる文化的背景をもつ同世代とコミュニケーションし協働する力、およびICTリテラシーを育成するための外国語教育のモデルプランを検討し案をまとめる。大枠のテーマ設定を含め今後の活動内容を確認。

9月 互いを知り親近感や共感を育む。学んだ言語表現を使ってコミュニケーションする。Kaohsiung Vocational-industrial Senior High Schoolと中国人民大学附属中学が参加。日中台間で、テレビ会議や「つながる」を利用し、お互いの自己紹介や学校・地域を紹介する。学んだ言語表現を活用するとともに、これまでに考察した異なる背景をもつ他者とのコミュニケーションを意識して表現する。

10月 フォトストーリーの素材を集める。

大枠のテーマにそって、それぞれの地域でフォトストーリーの素材となる写真を撮り、ウェブ上で共有する。

11月 フォトストーリーをつくる。

集めた写真素材をもとに、「つながる」やメール等で、伝えたいことや構成についてやりとりしながら、具体的なテーマを決め、フォトストーリーをつくる。互いの言語をサポートしながら、中国語、英語、日本語でストーリーを完成させる。

12月 フォトストーリーを共有する。

完成したフォトストーリーを「つながる」や学校のウェブサイトに掲載する。作品づくりを通して、また、各作品を見て気づいたこと、感じたことをまとめ、「つながる」にコメントを書き互いに共有する。

1月～2月 成果の検証と課題の検討

これまでの実践の成果と課題を検証・検討し、継続的に実践可能なモデルプランを完成する。

研究の成果

複数国・地域の同世代と、学習した言語を使って対話し、ともに考え、ともに創りあげる体験を通して、生徒が、さまざまな背景をもつ他者とのコミュニケーションについて意識し、考察を深め、実践していく力、また協働する力を身につけました。また、リアルなコミュニケーションやコラボレーションを通して言語学習の意味を理解することで、言語学習への動機づけを高めます。あわせて、ICTリテラシーを高め、今後、さまざまな表現方法を使って、多様な他者と交流していく可能性を広げました。生徒の作品やコメントは、各校のウェブサイトなどに掲載し、より多くの国・地域の同世代と共有しました。

異なる背景をもつ他者とコミュニケーションする力、協働する力、そしてICTリテラシーの育成をめざした外国語教育のモデルを開発することができました。この成果は、沖縄県高等学校中国語教育研究会や高等学校中国語教育研究会の教師研修活動、財団法人国際文化フォーラム等のウェブサイト、メーリングリストおよび機関誌で発表し、広く外国語教育関係者と共有しました。

活動報告10 グローバル人材育成(新規)

通常の授業時間を使用(総合的な学習の時間を含む)

- 時間外活動の時間を使用 □ ユネスコクラブの活動として実施
- ・ 実施時期 2013年4月～2014年3月
 - ・ 事業形態 対象者 高校1・2・3年生
 - ・ 他機関等との連携 大阪私学教育情報化研究会、ブリティッシュカウンシル
マレーシア ペカン、インドネシア 3校

研修の目的

グローバリズムの進展により、我が国でも地球規模で活躍できる人材を求める声が高まっている。が、それと逆行するかのように若者の内向き志向が指摘されている。若者を含む国民の中に異文化に対する耐性ができていない状況で、現在、急激に進行していると言われる産業の空洞化や、人口減による移民の受け入れなどが起これば、社会的混乱を生み出す。また、産業の空洞化は、内向き志向の若者の職を奪うことになり、これがさらに社会の混乱を増殖する。

このような社会・経済状況の中、教員もその影響を受け、教員自体が内向き志向に陥る恐れが多分にある。就職難の中、苦勞して教員になれたという思いを持つ教員が多くなれば、外にチャレンジしていく姿勢が生まれにくい。

最近の学生は、就職するには英語だけでは不十分で、プラスαがないと採用されないと考えているようである。学生たちの置かれた状況を考えると、例えば英語教員もまた、英語を「読み書き話す」手段・技術として教えるだけでは、時代を生きる学生を育てることはできない。進学校では、受験技術に秀でた教員が求められているが、卒業生の多くは、社会の中核を担う人材である。受験技術の習得だけでは、時代が求める発想力豊かな人材が育たない。以上のような時代認識から、本研究会は、「グローバルな人材を育てる教員の育成を目指す」ことを目的として、以下の活動を行う。

アジアを中心とした海外の学校とオンライン授業交換を実施し、検証を行い、その成果をもって教員研修会を実施する。授業者は、相手国言語を一定程度習得している教員が当たり、当該教員のその後の授業にどのような影響・効果をもたらすかも検証する。英語教員や他教科の教員が、アジアを中心とした国々とオンラインを含む直接・間接の「接触」体験を通じて、自ら成長することで、次代を担う人材を養成することができるのである。

研修の具体的計画

協力校代表 SMJK Keat Hwa (マレーシア) SMA Labschool Jakarta (インドネシア)
4～5月、準備期間。 機材・ソフトウェアの導入と習熟。アンケートを含む授業内容の調整。協力校との打ち合わせ。

6～8月 授業 (対協力校、対羽衣学園中学校高等学校 各5回)

最終回の授業は内田洋行大阪支店のフューチャークラスルームで公開し、その後意見交換会開催

9月 両国両校合同授業 (2回)

合同授業の内1回は公開授業、その後、意見交換会開催。進行、羽衣学園米田謙三。支援教員、笹恵津子 オンライン会議は、TeamViewer、動画録画は、BB FlashBack、教材提示はPowerPoint/Preziを使用。 授業を動画で録画・編集し、研究グループによる授業検証や意見交換会に利用する。

研究グループによる授業検証は、府内の私立学校教職員等7名で行い、一般対象の意見交換会は、大阪私学教育情報化研究会会員を中心とした教育関係者を対象に実施する。

成果と課題

1. 国際共同企画の難しさと本企画での対処

本企画の相手校の担当者とは迅速な情報交換ができる方で、企画進行がスムーズだった。ただ、テレビ会議に使うPCがペンティアム4という古いことと、専用のモデム (YES) を使うもので、企画実施に不安があった。そこで、本企画の協力者 (辻陽一氏: 元帝塚山学院泉ヶ丘中学校高等学校教員) が、6月、Ahmad High School を訪問、一週間滞在し、交流を深めるとともに現地の環境を視察。8月内田洋行での公開会議予定日が日曜日であったため、マレーシア側では、再三にわたり、実施不可を伝えてきた。粘り強く参加要請をし

た結果、協力を得ることができたが、これは、6月に辻氏、7月に私（米田）が同校を訪問し、ヒューマン・ネットワークを深めていた結果である。

2. アンケート結果と国際共同学習の重要性

宗教観、相手国理解、ソーシャルメディア利用、対西洋観&対アジア観、社会的不正への対応等、両国間に興味深い相違が見られたが、本企画に参加した日本の2校間にも違いが見られた。特に、西洋志向の帝塚山学院泉ヶ丘校に対し、羽衣学園高校は、明確にアジア志向を示した。これは、10数年にわたり、アジア各国との共同学習・交流に携わり、授業に生かしてきた同校の教育実践によるものである。アジア重視が叫ばれる今日、学校教育現場での取り組みの必要性・重要性を示唆している。

3. 今後の継続性について

アンケート結果をもとにした交流企画はAhmad High School側では、是非、継続したいと強く希望している。今回の実践では、申請書の英文、アンケート結果のプレゼン作成、相手側の通信環境、事前テスト、テレビ会議システムに不慣れな日本側担当者のサポートなど、現場教員をサポートする人材が不可欠であった。国際企画では、日々の業務に追われている現場教員だけでは、相当な負担がかかる。今後は、海外協力校とのネットワーク化を進めるとともに、辻氏のような退職教員などとのネットワーク化も強めていく必要がある。現在、我々のグループでは、マレーシア以外に、ASEAN諸国各国と中国、台湾、韓国など、ほぼ、東アジア全域の学校とネットワーク化されており、今後、企画をさらに発展させていく予定である。

活動報告11 外務省絆プロジェクト（新規）

- 通常の授業時間を使用（総合的な学習の時間を含む）
- 時間外活動の時間を使用 ユネスコクラブの活動として実施
 - ・ 実施時期 2014年5月～2014年12月
 - ・ 事業形態 対象者 高校1・2・3年生（カナダ訪問は23名）
 - ・ 他機関等との連携 日本ユネスコ協会連盟

アジア大洋州地域及び北米地域の41の国・地域から青少年を日本へ招へいし、交流プログラムや被災地視察、ボランティア活動等を実施するとともに、日本の青少年をそれぞれの地域へ派遣することを通じ、日本再生に関する外国の理解増進を目的として、日本政府により進められる事業。このうち、カナダとの交流事業については、外務省からの拠出先であるUNESCO（国際連合教育科学文化機関）から受託し、招聘に関しては公益社団法人日本ユネスコ協会連盟と財団法人日本国際協力センターが、また派遣に関しては、カナダUNESCO国内委員会が実施します。

活動の内容を補完する以下の資料があれば添付願います。※公表しません

- 紙媒体の参考資料（新聞、出版物など） CD-ROM 写真
- その他（

（2）活動時間について（下記から選択して下さい。）

- 通常の授業時間を使用（総合的な学習の時間を含む）
- 時間外活動の時間を使用
- ユネスコクラブの活動として実施
- その他（